

【特集：廣野喜幸先生ご退職記念】

生物学史一場

篠田 真理子¹

科哲の博士課程では、廣野さんが指導教官になってくださった。修士課程での村上陽一郎先生から引き継いでくださった橋本毅彦先生に博士論文をご指導いただいていたが、私自身の怠慢のため博論執筆が難航に難航を重ねた。廣野さんが1998年に科哲に着任後しばらくして、専門分野が近い方がいいのではないかという両先生のご配慮により指導教官が変更になったと思われる。その頃、廣野先生とお呼びしたら、「篠田さん、そんなに年は違わないでしょ先生は止めてください」とおっしゃったことがあり、この小文でも廣野さんと呼ばせていただく。

年齢がそれほど違う理由は、私が大学卒業後に企業で働いたのち科哲の修士課程に入学したからだ。ブランクがあった私からすると、廣野さんは一世代上の方という印象を持っている。博士論文は、這うようにしてどうにかこうにか提出に至ったのだが、穏やかな中にも決然と執筆を促してくださった廣野さんには、大いにご心配をおかけしたと今でも申し訳ない気持ちになる。

現在の科哲の様子は不案内なのだが、私の院生時代には、科哲の中に「生物学史」領域が存在していた²。それは研究分野のことでもあり、人的なつながりでもあった。そのことを、『生物学史研究』100号記念号に寄せたエッセイの中で、廣野さんは「生物学史一場」と表現されている。

少し引用させていただく。

[小松美彦さんは]「生物学史一場」とでも呼ぶべき「研究空間」の一つの中心として、斎藤光・松原洋子・坂野徹・林真理・森幸也・堂前雅史さんといった同世代の研究仲間の牽引役となっていく。・・・中略・・・[廣

1 恵泉女学園大学人間社会学部准教授。

2 日本科学史学会の中に生物学史分科会が存在する。

野さんが動物行動学・進化生態学を専攻した大学院生時代にも」生物学史研究とは縁が切れず、「勉強会要員」として、斎藤光さんたちほぼ同世代の仲間や、少し上の「世代」の米本昌平・河本英夫・鬼頭秀一・金森修・八耳俊文・小松真理子・鶴浦裕さんたちの輪の中で、生物学史研究にも接し続けることになる³。

私が科哲の修士課程に入学したのは1993年だが、入学前後に上記のような自主勉強会に参加させていただいた。廣野さんとも、そのような場でお目にかかったと記憶している。ここでは「勉強会要員」と謙遜されているが、その当時から廣野さんは勉強会にて学識を発揮なさっていた。つまり教官として着任される以前から、薫陶を受けていたことになる。

廣野さんより前の科哲の教授陣としては、村上陽一郎先生が生物学史の領域をもカバーしてくださっていたが、村上先生のご研究の範囲が幅広いこともあり、生物学史に関連した授業科目は非常勤の先生方に委ねられていた。したがって私のように素養のない者にとって、自主勉強会はありがたい存在だったのである。廣野さんらが編集として出版された『生命科学の近現代史』⁴は、そのような「場」において編まれた一書と言えるだろう。以来、『生物学史研究』及び生物学史研究会は、バックナンバーの保管から会場、折に触れての心強いアドバイスと、廣野さんに負うこと大である。

廣野さんの多岐にわたる業績において、歴史の重視という姿勢は一貫している。例えば、初期のご業績（動物行動学・進化生態学の分野以外では）である、「意味・苦境・転機としての病い－ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼッカーの病い観」⁵では、「病気を見て病人を見ない」という、いっけん現代医学・医療の問題点とみなされていることに対して、ヒポクラテス以来の医学史・生物学史、そして精神と意味という哲学的・哲学史的探究から説き起こしている。

また水俣病という、高度経済成長期日本の陰の部分が集約された問題に対し

3 廣野喜幸(2020)「生物学史と私 1977—1982」『生物学史研究』100, pp.111-114, 113.

4 廣野喜幸・市野川容孝・林真理編(2002)『生命科学の近現代史』勁草書房.

5 廣野喜幸(1998)「意味・苦境・転機としての病い－ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼッカーの病い観」『思想』885, pp.48-71.

でも、原田正純の「中毒の技術史的パターン」を引きつつ、ディオスコリデスに始まる化学物質としての水銀研究史、研究者被害・労働者の職業病被害・一般人の被害の歴史を丹念にたどり、水俣病における有機水銀リスク認知過程の現代史を詳細に追っている。「実際のリスク認知を歴史的に探究してみると、リスク心理学のみの知見では、その機序を十分説きえないおそれがある」と、リスク論における歴史研究の必要性を論じている⁶。どんな「現代的」に見えるテーマであっても、歴史研究に意義があることを示されているのである。

歴史を重視する姿勢の中に、生物学史・医学史へのまなざしもありなのではないだろうか。リスク論や生命倫理・環境倫理等々、生物や生命に関わる諸研究において、生物学・医学の歴史を踏まえておくことは基本になり、軸にもなるのだと示してくださっているのではないかと思う。例えば、前掲『生命科学の近現代史』では、基軸になる生物学・医学の思想的・社会史的側面を廣野さん（と共著の林真理さん）が執筆なさり、他の各章では各著者にそれぞれの専門分野を自由に執筆させてくださっている。

さらに、大学院時代の動物行動学・進化生態学も含めると、そこには「生きていること」とは何か、生命・生とは何かという大きな問いがあるのではないかと拝察する。

退官された後、どのような研究を手掛けられるご予定かは存じ上げないが、生物学史・医学史の分野においてもご研究を発展させることを、とりわけ、歴史への造詣を踏まえて「生きていること＝生命論」への思索を深められ、「生物学史一場」に大いなる刺激を与えてくださることを希う。

6 廣野喜幸（2017）「水銀リスク認知の歴史的分析 -- 日本における有機水銀中毒と水俣病に焦点を合わせて」『哲学・科学史論叢』19, pp.1-38, 32.